

學説を「初釋爲正」と記事して是認していること。又、「開遮不同章」では「逆誘除取章」の第十節たる迦牙説を、重説して詳細に釋されていることなど、これらは迦牙説を師説として殊更に尊重しているように思われることが、指摘しうるのである。

懷感の著書としては、現存する『釋淨土群疑論』七巻と、『群疑論』巻五に明示される『觀經疏』に、飛錫の『念佛三昧寶王論』に記事される『往生傳』とがある。この他に、『阿彌陀經疏』一卷・『觀無量壽經女義』二巻・『定散義疏』二巻の著作があつたことを、日本國の諸書に記載している。而してこれら諸書中、『定散義疏』は『群疑論』に顯わされる定散義の取扱いと相違する如く思われるから、懷感著とは見做され難いと思う。

### 『觀念法門』について

—善導疏に於けるその地位—

藤原 幸 章

『觀念法門』一卷は舊來四帖疏の後をうけてその念觀兩三昧論を詳しくしたものと解せられてきた。然るに私は逆にこれを四帖疏に先行する善導の最も初期の作品と考える。いまこれを①善導教學の成立過程から、②四帖疏との内容の矛盾から、③『安樂集』との緊密な對應關係から裏付けてゆこうとおもう。

第一に四帖疏に見られる善導の弘願中心の教學は單に『安樂集』の直接相承のみによつて成立したのではなく、寧ろ『安樂集』を通して知つた曇鸞の教學を積極的に受容したことに基く（拙稿「善導の古今構定と曇鸞の教學」『眞宗研究第一集』参照）。然るに善導

が曇鸞を咀嚼してその四帖疏の教學を確立するまでには相當の時間を要したに相違ない。しかもこの間のいわば準備時代の善導を支えていたものは道綽直傳の淨土教であつたことは、善導が道綽によつて先ず淨土教に開眼した事實によつて明瞭である。しかしてこのような道綽影響下における善導の『安樂集』領解の具體的表現こそ『觀念法門』であつたと思われる。

第二に本書の主要テーマの一たる念佛三昧論は明らかに定意の念佛であるが、それは四帖疏に力説せられた稱名念佛三昧論とは本質的に矛盾するところである。としたならば四帖疏を支える善導自身の廢立論を否定する如き内容をもつ本書が、四帖疏の後をうけて作られたものとはおもわれない。

第三に本書には四帖疏の如き明確な廢立の體系は未だ確立せられておらず、念觀は最後まで混亂している。このような混亂は本書が所謂要弘奄舍の書『安樂集』の直接的相承の結果であることを證するものといえる。いま特に兩書の對應著しいものに注意すると、②兩書の念觀論の内容はもとより、その證文までが殆んど一致していること、③共に念觀未分でありつつ終には觀佛から念佛への方向を辿ること、④共に『觀經』を積極的に取上げることなく、而も實質的にはこの『經』の經旨を開顯しようとしたものであること、⑤兩書に引用せられた諸經文及びその引用の精神が共に一致していること、等々これである。

かくして本書は『安樂集』に最も近く、四帖疏にはかなりの距りがあるというべく、従つてこの書は道綽門下か、又はそれに近い時代の善導の『安樂集』領解の書であり、道綽直傳の念觀兩三昧論を中心とした觀經概論である。それ故に本書は現存

する善導の著作中最も初期の作品であつて、四帖疏後の著作とはみるべきではない。本書をかくの如く位置づけることによつて、その念觀困亂の理由も肯けるし、舊來の不自然な解釋も解消せられる、のみならず諸傳に傳える善導自身の嚴しい實踐もまた理解することが出來ると信ずる。

### 天台四種三昧について

一行三昧と隨自意三昧

安藤俊雄

摩訶止觀に於て四種三昧のすべてが天台圓頓止觀の行として説かれたものであることは云ふまでもない。したがつて四種三昧の間に甲乙優劣の相異があるべき筈はない。けれども摩訶止觀第七重修章以下の論述内容と對照するとき、四種三昧の中でも常坐三昧（又は一行三昧）と非行非坐三昧（隨自意三昧）の二者が、最も正規且つ本格的な圓頓止觀の行として想定されてゐたことを知るのである。正修章は十境に對する十乘觀法の修行方法を論述するが、特に第一陰入界境に對する十乘觀の修行方法を説示するところに重點を置いており、その修行方法は第二煩惱境乃至菩薩境全體の規範たるべきものである。然るにその第一陰入界境についての觀法は第一端坐、第二歷緣の二段階に區分されるべきものとされてゐる。そして十乘觀は端坐の身儀に於て運用されるべき止修觀法である。十境の第二煩惱境以下の論述では端坐の正觀方法のみが説かれて、歷緣對境の説明を省略してゐるが、端坐と歷緣が一具であるといふのが摩訶止觀

の眞意である。これは天台大師の初期乃至中期間の講説や撰述を見ても同様であつて、例えば小止觀などでは、正修觀法を坐中正觀と歷緣對境、あるひは總觀と歷別觀の二段階に區分し、止觀を修行するものが、先ず端坐して實相を觀じ、然る後にはじめて行住坐臥を通じて六塵六作を觀ずべきものであると規定してゐる。端坐正觀と歷緣對境とが基本と應用との關係にあり、兩者が一具のものであるというのが天台大師の眞意である。してみると、四種三昧のなかで端坐を身儀とする常坐三昧、及び歷緣對境を特色とする非行非坐三昧が重要な意義をもつてゐることは明かである。

### 親恩感情の心理學的構造

調 圓 理

恩の體驗が恩感情である。その構造を明かにすることによつて、恩の實態を把握することができる。わたくしは昭和十五年十一月から同十六年二月までの期間に、「今までに最も有難いと感じたことをかきなさい」という問を出して、福岡縣三瀧郡大川町（現大川市）の小學校、舊制福岡縣立中學傳習館、舊制三瀧高等女學校、舊制佐賀高等學校の児童生徒に無記名で答をかかせた。こうして尋常小學一九八六、高等小學、女學校、中學校一五〇一、高等學校五七〇、總計四〇五七の答を得た。恩の種類を分類して、頻數の多い順に記せば、親、社會、君國、師、友情、友愛、道德、文化、宗教、境遇となる。親恩を書い